Ⅰサムエル８章1〜22節「王を立ててください〜王制への移行」

願い通りになったのは私が一生懸命に願ったから、真剣に祈ったから、答えられたのだという思いになることがあるかもしれません。しかし、私たちが祈ったから応えられたというよりむしろ、私たちの願いや祈りも神様に導かれ、神様の御業の中で用いられたということでしょう。そして、神様のご計画は私たちの考えをはるかに超えているのです。へりくだり、主の御業を感謝して受けとめたいと思います。

１．民の要求（：1〜5）

イスラエルには王はいませんでした。出エジプト以来、神様が立てたモーセやヨシュアによってイスラエルは導かれて来ました。カナンの地に定住した後、士師の時代がありました。士師たちはそれぞれ、一時的に、また部分的に治めたのです。全イスラエルを治め続ける王はいませんでしたし、士師がその働きを子どもに引き継ぐことはありませんでした。

最後の士師として登場したのがサムエルです。彼はイスラエルをさばいていました。聖所で主への礼拝を献げさせ、民の間の問題を律法に従って解決させていたのでしょう。彼は全イスラエルを指導していました。

やがてサムエルは年老いたとき、二人の息子をさばきつかさとして任命しました。このことでサムエルもこの後に起こる問題に加担してしまったのかもしれません。息子たちは父サムエルのようには歩みませんでした。彼らはベエル・シェバでさばきつかさをしていました。父の目の届かないところにいて、自分勝手な歩みをしていました。さばきを曲げていました。サムエルは聞こえてくる息子たちの様子に心を痛めていたことでしょう。かつて自分が幼いときに見ていた祭司エリとエリの息子たちのことを思い起こしていたでしょう。

サムエルが年老いて、息子たちがサムエルのようではないので、人々は不安になり、不満を持ちました。そこで長老たちが集まって協議し、サムエルのところにやって来て、訴えました。5節。

他の国々と同じようにイスラエルにも王がいて欲しいというのです。これまでのイスラエルは神様が王として治めてきました。ところがこの時、民は王が欲しいと求めました。

彼らの願いのもとにあるのは「ほかのすべての国民のように」ということです。イスラエルは神、主によって選ばれた主の民です。ほかのすべての国民の中から神様が特別に選び、神の民として召したのです。ですから、ほかの国民にないすばらしい特権を与えられていました。ところが、このときイスラエルは、神様に選ばれた民としての特別な立場を捨てて、この世の諸国民と同じようになろうとしたのです。

クリスチャンは主に選ばれ、主を礼拝し主に仕える主の民とされています。この世から取り分けられ、聖別されています。主が共に歩んでくださり、内に住んでいてくださいます。それなのに、祝福ある使命に生きることを捨てて、この世の人々と同じように生活しようとすることはないでしょうか。

２．主の答え（：6〜18）

民のこの要求は「サムエルの目には悪しきこと」でした。主に頼るよりも、王を立てることで救いと平安を得ようとしているからです。しかし、そのこともまず主に祈って、主のみこころを尋ねました。サムエルの祈りに対して主の答えがありました。

7節。民の要求を聞き入れよと主は言われます。主はここで積極的に命令しているというより、消極的な許可あるいは譲歩をしているということです。そして、その結果に対して主が責任を負うと言われるのです。

主はイスラエルだけでなく、全世界を治めています。人間の王を求める民の要求は、この永遠の王である方を拒否することでした。そのような民の態度は出エジプト以来これまでにも見られました。「私を捨てて、ほかの神々に仕えることだった」と主は言われます。偶像礼拝と同じだというのです。

しかし、9節。さばきつかさは民をさばきました。しかし、王は民を治めるのです。支配するのです。その「王の権利をはっきりと宣言せよ」と主は言われます。

そこでサムエルは王の権利について民に語りました。主のすべてのことばを伝えました。11 節から 17 節に記されています。王は民の息子たちを取り、兵役に就かせ、また王の耕作地で働かせたり武具を作らせたりして、王のために働かせます。その後のことばにも、王が「取る」ということが繰り返されています。王は民の娘

たちを取り、働かせます。民の畑を取り、家来たちに与えます。奴隷たちや家畜の最も良いものを取り、王の仕事をさせます。また、収穫や家畜の十分の一を納めさせます。これは主に献げる十分の一の他に王に納めるのです。そのように民は王の奴隷となるのだと警告します。

警告として語った上でサムエルは言います。18 節。それでも王を求めるのか、王を立てたことを後悔しても、主はお答えにならないと、民の覚悟を正されます。

「あなたがたが自分たちのために選んだ王」と言われています。さばきつかさは主が直接召して、用いられました。それに対して王は民が「自分たちのために選ぶ」のです。主が王を立てるのですが、民が自ら王に従うことを選ぶのです。その上で、自分たちのために選んだ王のゆえに泣き叫ぶことになっても、主はお答えにならないというのです。最後の警告のことばです。

３．主の計画（：19〜22）

そのような警告が与えられたにも関わらず、民はどうしても王が欲しいと求めます。19〜20 節。民は自分たちのことに集中しすぎています。この短いことばの中に「私たち」ということばが繰り返し使われています。自分たちの戦いにばかり注目して、主の主権、王権に目を向けることを忘れているようです。イスラエルと契約を結んでくださった神、主に対する不信仰の始まりでしょう。

ここでも民は「ほかのすべての国民のように」なることを求めています。ほかの国々のように、王が立ち、国を治め、軍隊を指揮し、敵と戦うことを求めています。イスラエルを治めておられる主に従うよりも、実際的な制度や力のある指導者に期待しているのです。

私たちは神、主に頼るでしょうか。それとも、人の作った制度や方法、あるいは能力のある人に頼るのでしょうか。それらに頼って、主に頼ることが二の次になってはならないのです。私たちは天地万物の造り主、すべての支配者である神、主に頼るべきです。私たちの心の態度こそ変わる必要があるのです。

目に見えないものよりも見えるものに頼る、説明のつかないことよりも納得のいくことを受け入れる、そういう傾向が私たちにはあります。しかし、そのような態度は自分が中心だと思います。まず神の国と神の義を求めているか、最後的に主に頼っているか、私たちは問われます。目には見えないけれどもすべてをご支配しておられ、みこころの内に導かれる神様を信頼するかどうかを問われるのです。

民は主を拒み、人間の王に頼ろうしているのですが、主は民の求めを聞き入れ、王を立てることを許容されます。21〜22 節。

実は、イスラエルに王が立てられるときが来ることは、すでにモーセによって語られていました。申命記 17 章 14〜15 節。主はすでに予告しておられ、王を立てる場合には、主が選ばれる者を立てなければならないと命じていました。また、王のあり方についての忠告も与えておられました。

ですから、イスラエルに王が立てられることは神様のご計画の中にあったことです。そして、神様のご計画はなおも続いていきます。イスラエルの王のことからも、神様が教えようとしていることがあるのです。究極的には王の王であるお方、主キリストへとつながっていくことなのです。

そのイスラエルに王が立てられるという転換点において、民の願いが聞き入れられました。サムエルを拒み、主を拒んだ民の願いでしたけれども聞き入れられたのです。そこには神様のご計画がありました。神、主のご計画の大きさ、不思議な導きがあることを思います。その主に対しての信頼とへりくだりが私たちには必要であると教えられます。

イスラエルの民が「ほかのすべての国民のように」なることを求めたように、私たちクリスチャンがほかの世の人々と同じように生活することを求めることはないでしょうか。恵みによって、主を礼拝し主に仕える主の民として、祝福あふれる使命に生かされているのですから、その歩みに専念していきましょう。

私たちを治め、この世界を治めているのは永遠の王である神様です。神様がイエス・キリストの十字架の血潮によって私たちと契約を結んでくださり、私たちを守り、最善のうちに導いてくださいます。

「私たち」のことばかりに目を留めてしまうことがありますが、主はご自身の計画のうちに私たち主の民を導いてくださるので、主の御前にへりくだって、主に信頼し続けることができるように祈りましょう。